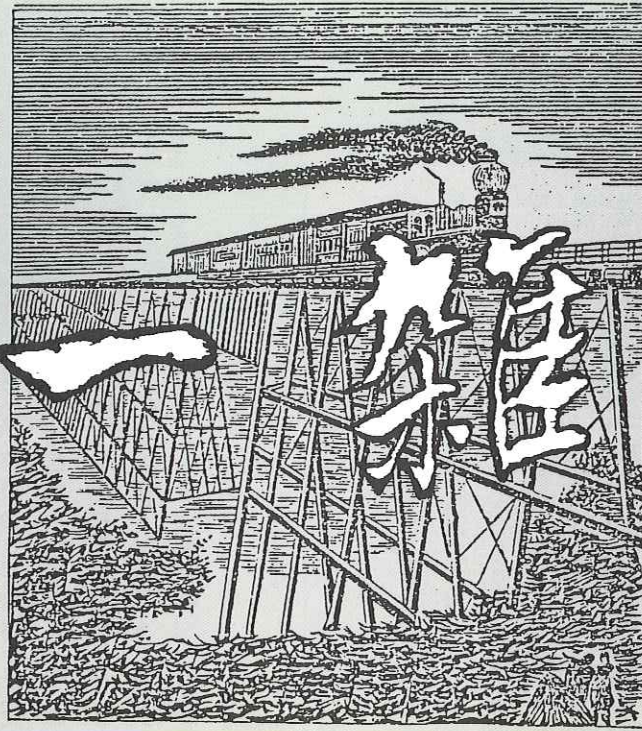


○米國鐵道線路なる白川高橋の圖  
 此所ハ圖せる物の利加  
 する高橋の現形に  
 爲其他同大橋  
 ランレスコまで日  
 山川と跋渉りて多夥 隧道高橋の設あり



# 七二雜報

本社新聞定價  
 一枚 一錢五厘 六ヶ月 前金 三拾錢  
 但遠國遞送之分ハ郵便料共 五拾六錢  
 三枚 六ヶ月 前金 八十錢  
 但遠國遞送之 郵便共 壹圓三十錢  
 六枚 六ヶ月 前金 一圓五十錢  
 但遠國遞送之 郵便共 二圓

本局

神戸中  
 六丁目

雜報社

社長兼印刷

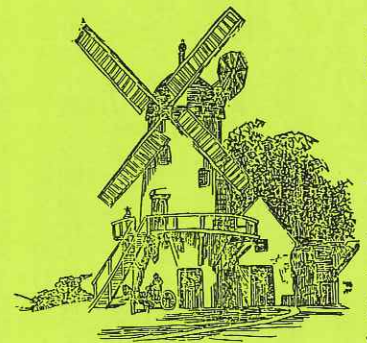
今村謙吉

編輯長

村上俊吉

『七二雜報』〔明治八年→十六年〕復刻版  
 全八卷・別冊一

文明開化の時代に、神戸を基点として  
 西欧的近代精神と生活を啓蒙し、  
 キリスト教を伝播する役割を担った、  
 日本最初のキリスト教新聞……



揃定価——十六万円十税

不二出版



推薦の  
ことば  
(順不同)

## 日本最古のキリスト教雑誌

大内三郎

日本にキリスト教(プロテスタンティズム)が移入されたのは、幕末・維新一九世紀後半である。したがって、仏教が伝えられた六世紀とは異なり、もう独自の日本文化圏を構成し、極端な言い方をすると、人は人間生死の問題を、キリスト教なしに充分解決できると考えられていた。その上、徳川幕府のキリシタン弾圧以来のキリスト教邪教観は、国民各層に浸透していた。それだけに、日本へのキリスト教移入は、かなりの困難が予想された。ところが、それを裏切るように、移入は無難に行なわれた。それは、明治維新を転機に、日本が近代化という巨大な歴史的課題に取り組み、その結果、キリスト教は、日本に不可欠の西洋の新文明とともに、その一環として扱えられ歓迎されたからに他ならない。

おおよそ、歴史に関心を寄せる者は、特にその始源に着目する。『七一雑報』は、日本最古のキリスト教雑誌として、日本のキリスト教の発足とほ

ぼ時を同じくして発刊された。それは「耶蘇正教は世を文明にするの基礎」(第一〇号)なる論文を掲げているところからわかるように、これを軸に、日常的な「電信機のはなし」「空中を暖かにすること」など新しい衛生・食事・技術・教育・機械の導入から、「両親の心え」「無学な人の心え」など、従来考えられもしなかった新しい日常道徳・思考様式・生活態度などの革新をうったえ、日本の社会に新風を吹きこんだ。さらに、東京大学教授モースの進化論を強く反駁したフォールズの「変遷論」ほか今日でもその名を逸することのできぬ論文を掲げているのも、本誌であることを忘れてはならない。それは、日本に移入されたキリスト教が、西洋の新文明といかに絡み、その新文明の何たるかを、巧まずして如実に遺憾なく示している。古い資料で本誌以上のものはない。

もう四〇年近くなるか。はるばる上洛し、同志社大学図書館(現在人文科学研究所の場所)の厚意で、埃りをはらいはらい『七一雑報』を、時を惜しんで筆写したことを思い出す。それが、今日全巻復刻をみる。まったく夢のようだが、夢ではないのだ。

## “甘露を嘗むる心地”の再現を祝う

杉井六郎

『七一雑報』は明治開教草創期のキリスト教と日本の社会との文化接触(クロス・カルチャー)に関するデータの宝庫である。しかし、従来その全体を通して見る便宜には恵まれていなかった。

このたび不二出版によって、その復刻がなされ、総目次が付されることは、はじめて、その全体の姿が克明になることになったわけで、改めて子供が孫が与えられるような喜びが湧いてくる思いである。

植村正久は、この『七一雑報』への思いをかつて次のような言葉で述べた。余輩は『七一雑報』によりて泰西の生活法文明流の風俗等を学びて、珍らしく感ぜし記憶、今に至るまで心を去らざるものあり。当時の読者が

七一紙上に現はれたる「天路歷程」の翻訳、フォールズ氏の「変遷論」等を甘露を嘗むるの心地して歓迎せしは、何時しか二〇余年前の昔とはなりぬ。  
(『福音新報』明治三年八月二六日 第一六五号)

植村正久の立場は、日本への宣教の草創期における開化と啓蒙、キリスト教文化の受容、さらにすでにその神学が遭遇していた進化論の問題に対して、『七一雑報』がまことに心地よい指南車であったことを回想するものである。  
いま、その回顧から一世紀をけみして、一八七五年から八三年にかけて、日本の都鄙を問わず、ひろい地平において、知識人、衆庶、老若男女が接触したキリスト教、それに伴った西洋の文化、思想、政治、経済、倫理などとの相関関係の実態を克明にすることは「甘露を嘗める」ばかりではない。近代文化形成にかかる今日の「良薬」と「処方箋」を知ることでもあり。ひろく江湖におすすめしたい。



## 関西版「文明開化・キリスト教伝播」の生きた記録

岡本道雄

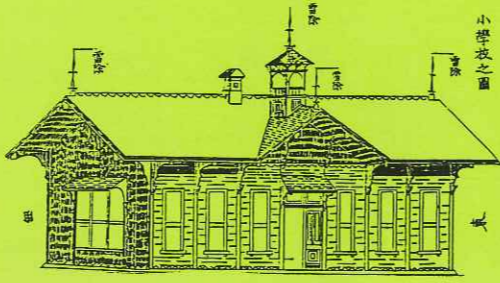
承らく幻の「週刊紙」として人々の目にふれることの少なかった『七一雑報』の復刻版が、同志社大学図書館所蔵の原本により、この度不二出版から発行される運びになったことを大変喜ばしく思う。

一八七五(明治八)年から七年半にわたって毎週発行された、わが国最初のキリスト教の「週刊紙」ではあったが、最初はキリスト教色はあまり強くはなく、誰にでも読める庶民の「週刊紙」を目指し、「ガラスのはなし」「電信機のはなし」、外国の地理・風景、西洋流「養生法」等、庶民の啓蒙と「文明開化」の推進をはかるうとしたものであり、神戸を中心とした「文明開化」がどのようなものであったかを知る生の資料として面白い。後半になると本邦初訳の「天路歷程」や「聖書のはなし」等、キリスト教色が濃くなって行くが、これまた当時のキリスト教の普及の進行程度を示

す資料として興味深い。神戸の中山手通の「雑報社」から発行されたものであるだけに、その近くに明治八年から発足した私どもの神戸女学院のことも、「山下通の女学校」、「諏訪山女学校」として、その校舎の図面や広告が掲載されている。

この『七一雑報』の原本は、一部の欠落はあるものの、可成りまとまったものが同志社大学図書館及び神戸女学院図書館に保存されていたが、稀覯書として、一部の関係者、研究者以外の目にふれることもなく今日に至ったのである。

先頃同志社大学人文科学研究所は、この『七一雑報』に関する四年間のすぐれた共同研究の成果を公刊された。今回のこの復刻版が可能になったのも、この研究のために『七一雑報』の総目次が作成され、欠落したものを集積し、完全なものにする努力がなされたからであろう。  
この復刻版という快挙によって、神戸を基点にした関西一円の文明開化や近代化、またキリスト教伝播の具体的な生の事実が、より多くの人々の目にふれ、より明らかになることを期待したい。



## 『七一雑報』のおもしろさ

笠原芳光

『七一雑報』は週刊紙である。だからおもしろい。それは「七日に一回発行される雑多な時報」という題名に明らかである。いわゆる週刊誌的な要素、つまり社会の出来事の論評も多い。西洋の珍しい文物を紹介しており、百科事典的である。それは神戸で発行されていたことの特徴でもある。

また各地の新聞の抜萃によるとはいえ、こまかな事件や人物の動静が記されている。近年、フランスのアナール学派の影響でさかんになった、日常生活の細部に注目する「社会史」の手法をすでに採りいれているかのごとくである。

パニヤンの「天路歷程」の本邦初訳をはじめとする翻訳物語もある。のちに徳富蘆花をして「七一雑報」なつかしい名ではある。此名を聞くと小生は忽ち十二の少年になる」と歎せしめた。

こうのべてくると、『七一雑報』は日本最初のキリスト教ジャーナリズムだ、という人があるだろう。けれど創刊号を見ると、キリスト教色はほとんどない。実質上の主筆O・H・ギューリックは本国に宛てて、この新聞の意図を「啓蒙、文明化、キリスト教化」とのべている。この順序に意味がある。

明治初頭のキリスト教は文明開化の精神であった。文化と渾然一体であったところに、その魅力があった。それが時代とともに宗教として確立されるにつれ、社会や文化の問題と区別され、遊離していく。

『七一雑報』を読み進めていくと、その変化がよくわかる。キリスト教に固有の、即自的な記事がしだいに増え、「八兵衛さんでもお松さんでもお竹さんでも」「此新聞しをよんで開化の仲間人をなさる様」という当初の意図は消えていく。

これはキリスト教の発展が、それとも衰頹か。そんなことを考えさせてくれる点でも、『七一雑報』は無類におもしろい。

# 創設期のキリスト教会の状況を 知るための貴重な資料

竹中正夫

『七一雑報』は、明治八年二月から神戸のキリスト者たちがアメリカン・ボードの宣教師O・H・ギューリックの支援をうけて出版した週刊紙であった。その創刊のことばにつきの一節がある。

いろは四十八文字さへ知ていれば後は読書の考かへにて解るやうに致し  
ます趣向故向裏の七兵衛さんでも隣町の八兵衛さんでもお松さんでもお  
竹さんでも亦是僻ひの百姓衆でも此新聞しをよんで開化の仲間人をなさ  
る様にお頼申します

このわが国最古のキリスト教の週刊紙には、文明開化の情報が庶民にわ  
かりやすいように満載されている。ガラス、電信機、鉄道、眼ざまし時計  
郵便についてはなしなどが掲載され、ベリーの「養生の法」、ラーネッ  
ドの「経済略説」、バニヤンの「天路歷程」などが連載されているのをは  
じめ、世界の各地の情報がつきつきと写真入りで紹介されている。

さらに『七一雑報』には、全国のキリスト教の教勢が克明に報じられて  
おり、明治期の各地の教会の状況を知る上においても、創設期のキリスト  
教主義学校の様子を辿る点からも、欠くことのできない資料といえよう。

創刊いらい一〇〇年以上を経た『七一雑報』は今日では、貴重な存在で  
ある。四方と背を皮で製本された合本は、骨董品のようなもので、なか  
か身近において見ることはむづかしい。今回の復刻版によって広く研究に  
用いられるようになることは、喜ばしいことである。

## 草創期の日韓キリスト教の関係を 伝える資料

韓哲曦(西原基一郎)

いま韓国のキリスト教は驚異的な発展ぶりであり、信徒数は全人口の三〇%  
に迫り、全国津々浦々に十字架が立っている。ソウルでは喫茶店の数より  
教会の数の方が多いときかされるほどである。その韓国のプロテスタント  
は一〇〇周年を越え、草創期よりの新聞、雑誌、機関紙などの復刻がさか  
らである。

ところがプロテスタント伝来後一三〇年の日本では、信徒数が全人口の  
一%以下ということもあってか、こうした開教以来の新聞、雑誌類の復刻  
は数えるほどしか無い。そのなかで、先に『六合雑誌』『上毛教界月報』に  
つづいて、入手はもちろん、一般閲覧も極めて困難な、日本最初の週刊紙  
『七一雑報』が復刻されることの意義は大きい。

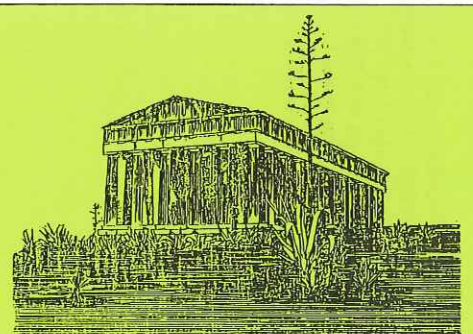
『七一雑報』は、維新时期日本の文明開化の大潮流のなかで、キリスト教も  
その一翼を担うとの意気こみで、文化、思想、宗教、経済、倫理から、家

庭、衛生など日常生活の広い分野にわたって、世界的視野で情報を伝え、  
改善を勧め、合せてキリスト教を説いた。それも平易な文章で、一般庶民  
が読んでも理解できるように、という熱意がみなぎっていた。

そしてなお厳しい禁教下の朝鮮での天主教弾圧を伝え、在韓日本人信徒  
の、日本人伝道者派遣の要請を報じている。とくに韓国内外での最初のプ  
ロテスタント受洗者となった、李樹廷について相当詳しく報じていて重要  
である。農学の師である津田仙によってキリスト教に導かれるいきさつ、  
露月町教会での受洗時の心境、東京での全国基督教徒大会に出席し祈禱  
したことなどを報じ、儒教で育ち開化派に属した、李樹廷の漢文の信仰告  
白を、相当な長文であるが載せており興味深い。

この李樹廷のアメリカに対する宣教師派遣の、数度にわたる強い要請に  
よって、一八八五年四月五日、長老教会のアンダーウッド、監理教会のア  
ペンセラーが仁川に上陸、朝鮮プロテスタントが開教されるのである。

こうした草創期の日韓キリスト教の関係を伝えるものとしても、『七一雑  
報』は極めて重要な資料であり、今回復刻されて手近かなものとなること  
を、心より喜ぶものである。



# 報 雜 一 七

號 一 第 日 曜 月 日 七 廿 月 二 十 年 八 治 明

## 雜 報

ガラスのはなし

ガラスハ三千五百年程前に「エテプト」に土中に見へしが其後千五百年程後に「ヒシヤ」の小川なる砂にもつて製造を初めしが至つて貴重ものにて中占二百年前まで此ガラスを窓に用ひたるもの國王が或いの金満家斗りなりしが近頃ガラスの價大いに下落して人々皆このガラスを用ゆる事となりたるなり日陰の草木は成長する能ざるごとく人も穴或いの暗室に付めば自らの病を生ぜし康健を害するもれなるに此ガラスは人家に窓或は口口に立て寒風塵埃と外小防ぎ光と熱とを能く内導びきて人は健康と助け其他ランプノコップ徳利種類之器とつくづく其用を足其目を娛しましむれば人間日用は皆ガラスも亦必用なるもれといふべし然しながら人々は知る如く此ガラスに至つてもろき物にやゝもすれを損トやをく世間には下女やでつち之此ガラスは爲小膽を冷むこと幾度なるをしりざりしが此頃英は(ナチュル)新聞小をい字事の職くありせし此年フランスのリラバステレといふ人がガラスを堅製造せることと發明しるる其ガラスは通例のガラスより強いのこと五倍なまじ或試ミと用以厚さ二分のガラス板を高さ五尺の處より鉄れ上お落し亦一丈貳尺の高さより鉄砲玉とガラス板の上お落せしかし彈丸へすのみ小くガラスは少しも破損せることなし此ガラスと製造する爲に資金二拾五方だらの會社を建たり亦此ガラスを興する方はガラスを作るとき其熱さのさめぬうちに煎つた油の中へ入るなり尤も右の油られ中へは他ホまぶ藥品々交るそ字でそか其薬りの名を書くわりません也へ何だか分りませんがガラスを製造なさるお方ら此事がらより工夫をなまつたら亦よい發明も出来ましよラト存じます

○合衆國の西サンフランシスコといふ處より來しに當り百里斗り隔て海は平面より高きこと凡そ廿丁斗なる金山の上に建たる町あり此處へハ支那人も多分働らさず來る居たりし其中心ハ一人が耶穌教を傳へて大いに信じて何卒しく此真と此教へ人々に知らせ度れれどもひ自分の働いて得たる金にて會堂を立て一周間に四夜と日曜日に二度と其會堂にて教へるに聞かれ凡を百五十人斗り之ハ皆曠山を働らく支那人などぞ

○此間より元町邊と通行する時向ふれば方から全體に瘡が吹出して見ても胸は悪くなる様な犬が來ました其時丁度側に異人さんが居合せアア云ますに之此やう奇病犬と生て置く其病が人に傳染して畜生の爲に人が難はせる例にすぐおのらせ夫故に私くこの國を去て之何程驚かせる犬にぞも病犬とそれば直に殺してよいはず日本をい何故此様奇犬と生て置ますかと申しましやたの實に尤もあ事と存トす當時の不淨なれと道に捨てて見るいといふこと皆さん克お承知の事なれ病犬おんも序に方付ておもひやうたいもれだとなる人かち申越れます

## 論 說

日本國中は男も女も平均より其中心を新聞紙やお布告書あぞと差支なく讀通例は字讀が何程あまじよふら七分三といふいがか少と六ヶ敷おさいましよふ而て見るは是か先小供の進を稽古して字讀あかるどト處の今差當り稽古は時節の遅れ多く人々草双紙や淨瑠璃と本と讀を爲なる教へば外國は模樣の先生方論說はと聽ここの出來せんでハ文明開化は仲間ばつぎよて世間せまい斗り望まなく報國の志す赤心も起つね心と教しゆるは愛心もへない譯をささいましよ夫故此新聞紙に之投書の外成る丈解よく平しい語で先生方高談

内容見本(第一卷第一号より)原寸大

『七一雑報』全八巻・別冊一 概要

体裁

A4判・上製・函入り／総三〇二二ページ

別冊

解説・総目次・索引(これのみ分売可・本体価一万円十税)

解説

山口光朔

推薦

大内三郎

岡本道雄

笠原芳光

杉井六郎

竹中正夫

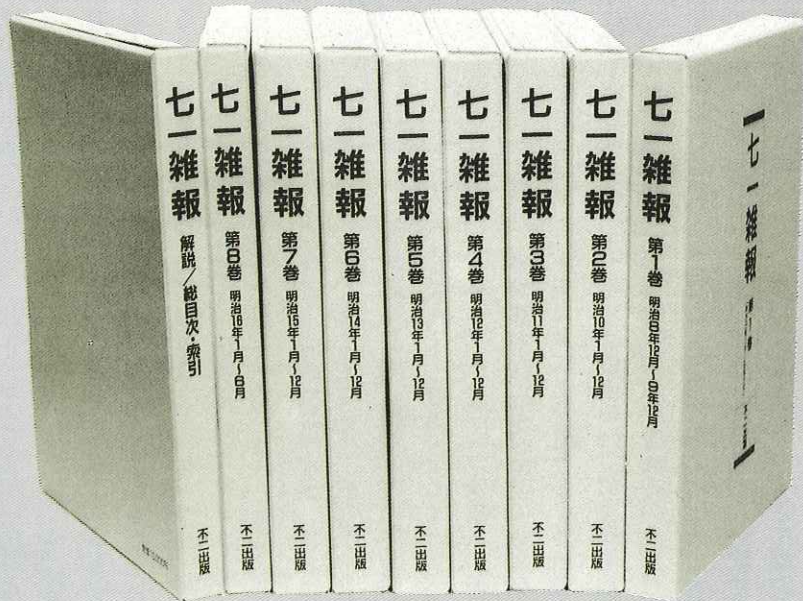
韓哲曦

揃定価

十六万円十税(分売不可)

収録概要

巻数	発行年月	頁数	本体価	ISBN
第一巻	明治8年12月～9年12月	三二二	二万円	4-8350-2299-8
第二巻	明治10年1月～12月	四一六	二万円	4-8350-2300-5
第三巻	明治11年1月～12月	四一六	二万円	4-8350-2301-3
第四巻	明治12年1月～12月	四一六	二万円	4-8350-2303-X
第五巻	明治13年1月～12月	四一六	二万円	4-8350-2304-8
第六巻	明治14年1月～12月	四一六	二万円	4-8350-2305-6
第七巻	明治15年1月～12月	四一八	二万円	4-8350-2307-2
第八巻	明治16年1月～6月	一九二	一万円	4-8350-2308-0
別冊	解説・総目次・索引	一〇〇	一万円	4-8350-2309-9



表示価格は税別

不二出版

東京都文京区向丘一―二―二  
 電話〇三〇三八二〇四四三三  
 FAX〇三〇三八二〇四四六四  
 替〇〇一六〇二一九四〇八四